

日本大学芸術学部 「芸術学部紀要」 第55号抜刷 平成24年3月

ラ・ヴリリエール邸ギャラリーとローマ古代史を描く歴史画

木村三郎

# ラ・ヴリリエール邸ギャラリーとローマ古代史を描く歴史画

木村 三郎

要 旨

Saburo KIMURA, 《La Galerie de l'Hôtel de La Vrillière et la peinture d'histoire》, *Research in Arts, College of Arts, Nihon University*, 2011, no.55

L'auteur a traduit en japonais la description par Henri SAUVAL, publié vers 1655, sur la galerie de l'Hôtel de la Vrillière, construit par le Marquis de la Vrillière entre 1635 et 1650. Il a aussi essayé de présenter les études par C. HAFFNER et S. COTTE, publiées dans le catalogue d'exposition *Seicento*, 1988. Et d'autre part, il a précisé la signification de l'enseignement artistique, comme mécène, pour l'artiste parisien du point de vue iconographique. Pour la réalisation picturale de l'histoire romaine, encore mal connue à l'époque, il a élaboré la galerie la plus achevée de Paris, du goût italien réalisé par les peintres italiens contemporains.

Key Words :

La Galerie, l'Hôtel de La Vrillière, Louis de La Vrillière, François Mansart, la peinture d'histoire, histoire romaine, Henri Sauval, cavalier Bernin, mécène, Nicolas Poussin, Pietro da Cortona, Guido Reni, Guercino, Carlo Maratta, Alessandro Turchi, Plutarque, Tite-Live,

## I ラ・ヴリリエール邸・・・先行研究と問題の所在

フランス十七世紀で、「パリの中にあるギャラリー (la galerie) と比べて、あるいは、フランス全土のもの比べても、最も高い完成度を誇る」(『パリの文化財の歴史とその研究』SAUVAL, p.229) と称された、貴族の邸宅内のギャラリーがあった。建築物自体は、その後、改築と破壊を受け、現在は、「フランス銀行」となっている。パリの中心街であるオペラ座近くの建物である。当時は、ラ・ヴリリエール邸 L'HOTEL DE LA VRILLIERE (図2) と呼ばれた。

この建築は、十七世紀フランスを代表する建築家であるフランソワ・マンサール(一五九八一―一六六六)の作品である。若くしてこのジャンルに才能を発揮したマンサールは、国王ルイ十三世の弟ガストン・ドルレアンのためのブロー城改築計画

(一六三五―一三八、一部のみ実現)と平行して、都市住宅建築(HOTEL)を手がけていた。そうした建築の代表例が、ラ・ヴリリエール邸である<sup>(1)</sup>。

ソヴァールは、建築の全体についての詳細な記述を残している。邸宅内のギャラリーについては、他の建築の作例が、古典主義的な美学を誇っているように「縦横の長さが合理的で (raisonnable)、規則性を持っている (régulier) のは、ひとえにマンサールの設計のおかげである。」と指摘している<sup>(2)</sup>。

本稿では、図2の左手二階にあつた、ラ・ヴリリエール邸ギャラリーにおける歴史画を中心とした展示の状況を、同時代資料である、ラ・ヴリリエール家の遺産目録や(図3)や、ソヴァールの記述の翻訳を中心に、近年の優れた研究を紹介する。一方で、フランス十七世紀絵画史における、古代ローマ史を描いた歴史画の一つの

意味が、教育的な目的にあったことを指摘することを目的としている。先行研究については、下記の参考文献一覧に個々の文献の内容を記述してある。建築史研究と絵画史研究とを混在させた記述を試みたが、それは、邸宅内ギャラリーという特殊事情を考えた際に、より正確な理解のために必要であると考えたからである。

## II コレクションの形成

フランスでは、十七世紀の三十年代から六十年代にかけて、それまでであった博物学的な収集趣味に代わって、芸術性の高い美術作品の収集が流行となった<sup>3)</sup>。それは、とりわけ、枢機卿リシュリユの周辺で認められた。そうした中でも目立ったコレクターが、ルイ・フェリポ・ド・ラ・ヴリエール(二世) Louis II Phélypeaux de La Vrillièreであった(図1)<sup>4)</sup>。以下、一九八八年に行われた「十七世紀展(Seicento)」のカタログの中で、アブネール(1988 HAFFNER)とコテ(COTTE,1988)が行った調査報告を中心に、その論考の紹介を試みたい。

ここで先ず、ラ・ヴリエールのコレクション形成の歴史を若干たどってみたい。一六三〇年八月二二日、若き国務卿ラ・ヴリエールが、書簡に、絵画陳列室を作る意向が書かれてくる(SCHNAPPER,Curieux,2005,p.52)。この時期を第一期とすることができらる

一六三一年を若干過ぎた頃、リヨンの商人から、G・レーニ作《ヘレネの略奪》(図G4)を購入した<sup>5)</sup>。

侯爵は、その後、ローマ在住の画家に制作を依頼して、邸の中のギャラリーを、黄金と白でできた壁面空間で埋め、その中に、一流の画家たちの絵画をはめ込んだ展示をするに関心を持った(1985 COTTE, p.85)。

一六三四年、セギエ大法官から、シャルル五世の城壁を壊した跡地である、枢機卿宮庭園に接した地所を譲り受ける(1988 HAFFNER,p.30)。

第二期が、一六三五年頃から四〇年代の半ばである。注文が急増する時期である。この頃は、邸の建設が平行して行われている(1988 HAFFNER,p.30)。

一六三五 邸宅建設が始まる(BRAHAM and SMITH,text,p.210)。

一六三七年に、ゲエルチーノとプッサンの作品を入手している(1988 HAFFNER,p.30)。一六三八年三月、ラ・ヴリエールは、一部出来上がったこの邸に居住し始めた(1988 HAFFNER,p.29)。

一六四六年五月五日付けで、ローマから帰国直後のフランス人画家、フランソワ・

ペリエが担当したフレスコ画の天井の制作に関する、署名入りの書類が残されている<sup>6)</sup>。

一六五〇年に邸宅が完成する(CHAULLIER et LOUITS,1998,p.295)。従って、この天井装飾もこの頃までには完成していたと思われる。

一六五五年頃に、資料に邦訳を試みたソヴァールが記録が書かれる<sup>7)</sup>。八点の作品だけがその場所に展示されていたということがわかる。

第三期とされるのが、一六六〇年頃である(この時期に制作された、コルトーナの作品、図G8を参照)。一六三五年から数えると、四半世紀の時間が経過しており、コレクションの形成には、相当長期間が必要であったことがわかる(1988 HAFFNER,p.31)。

一七八一年、ラ・ヴリエールが死亡。この時期まで、ここに居住した(CHAULLIER et LOUITS,1998,p.295)。

## III ラ・ヴリエール邸ギャラリーとイタリア趣味

このギャラリーには、図3に示したように、側壁に、十点の絵画と、ファルネーゼ・ギャラリーにある作品の模写二点、一方で、天井には、ペリエによる寓意画《四大元素》の連作が描かれている(1988 HAFFNER,p.32)。図では下に位置する入り口から入って右手から、側壁の十点が、間にカラッチの原作に基づく模写二点を挟んで、連なっている。鑑賞者は、右手から眺め、順次、当代一流画家の手になる歴史画群を鑑賞することとなる。本稿では、下記の「資料」の中に、ソヴァールが執筆した、側壁十点のうち八点の記述部分を邦訳し掲載している。

1. プッサンの《カミルスとファレレイ人の教師》、2. ゲエルチーノ《母から懇願されるコロオラス》、3. P・ダ・コルトーナ《ラレンティアにロムルスとレムスを渡すファウストゥルス》、4. G・レーニ《ヘレネの略奪》、5. P・ダ・コルトーナ《クレオパトラを王位に返すカエサル》、6. ゲエルチーノ《ロムルスとタイウスを引き離すヘルシリア》、7. ゲエルチーノ《息子に別れを告げる小カトー》、8. P・ダ・コルトーナ《ティブルの巫女とアウグストゥス帝》、9. C・マラッタ《寺院の扉を閉めるアウグストゥス》、10. A・トゥルキ《クレオパトラの死》。

以上にくわえて、入り口とその向かい側に、先に指摘したファルネーゼ・ギャラ

リーからの模写二点がある。カラッチの《ケファロスとアウロラ》、そして《ベルセウスとアンドロメダ》である。

#### A コレクションの全容

しかし、ラ・ヴリエールが収集した絵画群は、ギャラリーに設置・展示された十点の作品だけではない。その数は、実は膨大であった。以下に、その全体像を確認しておきたいと思う。

時代は少し下って、一六七二年、ラ・ヴリエール侯爵夫人が死亡。財産目録が作成され、その中には、二五一点の絵画が含まれている。王の常任画家である、P・ミニヤールの前で作成されたものである<sup>(80)</sup>。

一六八一年に、ラ・ヴリエール侯爵が死亡し、その財産目録が作成されている。王の常任画家である、P・ブルギニョンの前で作成された二四七点の絵画を含んでいる<sup>(81)</sup>。

これらは、ギャラリーだけでなく、絵画陳列室等を中心に、何カ所かに分散されて収蔵・展示されていた模様である。

たとえば、ラ・ヴリエール・コレクションにあって、現在その行方が確認されているものもある。ルーヴル美術館に所蔵されている作品としては、ラッファエッロ《冠の聖母》(Inv.376)、シャンパーニュ《枢機卿リシユリユー》(Inv.1136)、ブルドン《サロモン像崇拝》(Inv.2800)、メッセン《トビアスと父》(Inv.1335)、L・スストリス《アドニスの死》(Inv.1759)等を挙げることができる。その他の美術館にあるものとしては、ティチアーノ《ベルセウスとアンドロメダ》(ウォーレス・コレクション)、ブッサン《洗礼者ヨハネと聖母子》(オハイオ、トレド美術館)、同《羊飼いの礼拝》(ロンドン)、ナシヨナル・ギャラリー(など)である。必ずしも、同時代イタリアの先端的な表現を実現している画家の作品だけではない、優品の数々を挙げる<sup>(82)</sup>ことができる。

#### B 同時代のバリのギャラリーとラ・ヴリエールのイタリア趣味

ところで、この時代知られていたバリのギャラリーは少なくない。たとえば、マリー・ド・メデシス・ギャラリー(リュクサンブール宮殿)、ギャラリー・マザラン(国立図書館)、ヘラクレス・ギャラリー(ランペール邸)、アポロンの間とグラ

ンド・ギャラリー(ルーヴル)、鏡の間(ヴェルサイユ宮殿)を挙げることができるからである。その意味では伝統的なものであり、特異性を持っているものとは言えない。

とりわけ、一六四〇年に、ブッサンが、滞在していたローマからリシユリユーによって召喚された理由は、主に、ルーヴル宮の中グラント・ギャラリー装飾のためであった。この大仕事は、当時、イギリスに滞在していた、ヴァン・ダイクの耳にも入り、自らその仕事への委嘱を求めて海を越え、パリを訪問するほどであった。一流たらんとする画家にとっても、大きな公共仕事を引き受ける程の仕事であったからである(木村・二〇〇六、論文3、4、8)。

リュクサンブール宮殿には、ルーベンスによる「マリー・ド・メデシスの生涯」の連作が飾られ、壮麗な、いわば、「フランドル趣味」の世界を実現していた。その意味からは、ラ・ヴリエール侯爵は、「イタリア趣味」(1988 COTTE)に満ちたギャラリーを作り上げたのである。

#### C ラ・ヴリエール邸ギャラリーのめざしたもの

しばしば引用して来たアフネル(1988)、並びに、コテ(1988)両者の論考では、手本となったファルネーゼ宮ギャラリーと比べて、このギャラリーにおける図像プログラムには統一性がないことが指摘されている。しかし、その理由についての詳しい分析はなされていない。論者は、ここで、その事実を確認して上で、何故に、古代ローマ史を描いた絵画のギャラリーなのかについて、分析を試みたいと思っ。ラ・ヴリエール侯爵の収集・展示と、その教育的な意図についての仮説を述べてみたいと思うからである。

ピグラーが執筆した『バロック主題事典』(PIGLER 1974 II, p.351-442)によれば、この時代における、古代ギリシヤ・ローマの歴史を描いた作例は膨大な数にのぼる。とりわけ、イタリアとオランダを中心に多数の作例がリスト・アップされている。しかしながら、そのリストを丹念にたどって見ると、フランスにおいては、一六世紀以降、ラ・ヴリエールがギャラリーの構想を実現する頃である一六三〇年より以前に描かれた、ローマ古代史を扱う歴史画の数は、限られた数だけである(少数の作例があるとしても、フォンテーヌブロー時代に、J・ペランジュなどの版画である)。一九七四年に改定が出されたこの事典のリストがどこまで基礎資料になり得るかは、冷静に判断すべきではあるが、管見によっても、ブッサン以前の作例で

(63) ラ・ヴリエール邸ギャラリーとローマ古代史を描く歴史画

は、フランス画家の場合多いとはいえない。一方で、前世紀、フォンテーヌブロー宮殿には、イタリアのトップ・スターたちを実際に招聘して描かせた多くの神話画や寓意画、そして、タッソーによる主題を描く作品群がある。その影響は、やがて歴史画家として大成するプッサンの場合ですら、深い影響を受けている。そうした物語内容を持つジャンルと古代史を描く作品とでは事情が大きく異なるのである。

ところで、ラ・ヴリリエール侯爵の死後の蔵書目録に、ギャラリー自体の建築が完成する一六五〇年以前の刊行物として、ヴァザーリの著作『対話』(VASARI, *Ragionamenti*, 1568)、リドルフィの著作『芸術の驚異』(RIDOLFI, *Meraviglie dell'arte*, 1648)が存在していることが指摘されている。その後にも、フェリシアノ著『対話』(FELIBIEN, *ENTRETIENS*, 1666-88)、ベローリ著『画家伝』(BELLORI, *VITE*, 1672)、マルヴァシア著『画家伝』(MALVASIA, *FELSINA PITTRICE*, 1678)が指摘されている(1988 HAFNER, p.38)。この事実からも、侯爵が美術についての該博な教養人であったことが伺える。こうした事実からは、必ずしも、その蔵書目録には記述がないとしても、ギャラリーの主であるラ・ヴリリエール侯爵の古典古代への知識、教養、読書傾向はおのずと、理解されるといえる。

ギャラリー展示作品の主題を確認すれば、リウイス、そして、アルタルコスのローマ古代史への並々ならぬ関心があつたことは間違いないであろう。たとえば、ラテン語版だけでなく、一五五九年にアミヨ(G. AMYOT)が仏訳し、その後版を重ねる、著名なアルタルコスの『英雄伝』(KIMURA, *Faleries*, 1996, Note 15)を認知していたであろうことは無理な想定ではない。

ところで、この時代、ローマ古代史を扱ったイメージ資料としては二つのケースがあることを確認しておきたい。一つは、拙論(木村・「アリオ論」二〇〇九)で紹介したように、イタリアの版画家テンペスタの影響下で、パリ在住の版画家が、ローマ古代史の人物の騎馬像(『ローマ皇帝アウグストゥス』、『同ティベリウス』、『同カリグラ』)等の版画を制作している事実である。アリオだけでなく、北方出身の、たとえば、ホルツィウスのような版画家も、古代史にまつわる作例(『ムキウス・スカエウオラ』等の英雄像連作)を制作していて、よく知られていた。しばしば単独像を画面の前景に強調した、英雄の半ば肖像に近い作品である。作品によっては、画面の遠景に小さく英雄譚のエピソード挿入する場合もある。しかし、残念ながら、本来の古代史の物語性は添え物にしたにすぎない(KIMURA, *Faleries*, 1996, Fig.13, note 41)。

他方、古代史に関する挿絵入りの図書が重要である。論者は、かつて、このラ・ヴリリエール邸ギャラリーに展示されている、プッサン作『カミルスとファレリイ人の教師』(図G1)について詳しく論じた。特に、一五二六年、ヴェネツィアで刊行されたアルタルコス『英雄伝』、並びに、一五六八年、フランクフルト刊行の『英雄伝』の挿絵がどのように画家に影響を及ぼしたかを実証的に詳述した(KIMURA, *Faleries*, 1986)。プッサンの場合、ローマでの読書と制作であつたが、図書というメディアが、この時代でも国境を越えて移動していたことは容易に想定できるわけであり、パリ在住の、リシュリユエ枢機卿の文化環境では不可能なことではない。つまり、パリ在住の知識人たちは、そうした挿絵という画像の入った図書を書斎の書架に置きながら教養を身に付けていたと思われる。

残念ながら仏語版図書で、挿絵が挿入されたローマ古代史関係図書は多くはない。しかしながら、ラ・ヴリリエールは、豊かな資金とリシュリユエの周辺にいて豊かな情報量を持っていた国務卿であつた。とすれば、彼が、ヴァザーリの図書を所有していた事実から考えると、北方のフランタン商会からの出版物やヴェネツィアで刊行された図書を入手していても無理はない。一方で、フォンテーヌブローにおける神話画や寓意画と異なり、古代史を主題としたタブローの場合、版画を周辺に持ちながらも、同じ主題を大画面に描き上げる構想力のある画家は未だ生まれてはいなかったのである。

ラ・ヴリリエールが、G・レーニが描いた『ヘレナの略奪』(図G4)を、一六三二年を若干過ぎた頃に入手した時期の事情を再度考察して見たい。高い教養を持ち、古代への憧憬を持つこの侯爵が、初めて、ギリシャとイタリアの古代史とも重複する主題を扱ったレーニの秀作を目にし、激しく心を揺さぶられたとしても無理はないのではないだろうか。版画や挿絵という小振りの単色の世界では知っていたイメージが、油彩の輝く画面として、この感性鋭い知識人の前に登場したのである。同じ頃に、コレクションと邸宅内ギャラリーの創設を夢想したとして、その事情にはこのような関係があつたものと思われる。フランソワ一世のように、イタリアのトップ・スターたちを直接招聘することこそ不可能であつた。しかしながら、たとえば、アルタルコスの英雄伝の挿絵本の中にある各々の版画を念頭に、ギャラリーの中にそれらをヒントとした一群のタブローを展示することは、この時代、刺激的でユニークな企画であつたといえる。

## D 騎士ベルニーニの訪問と王立絵画彫刻アカデミー

ほぼ十数年後の、一六六五年、イタリアの建築家であり彫刻家でもあったベルニーニが、フランス滞在中に、ラ・ヴリリエール邸ギャラリーを訪れることとなる。ルーヴル宮殿の設計に携わる頃の話である。

十月十一日、同伴しているシヤントルーの勧めで、ラ・ヴリリエール邸を訪れる。邸宅自体や、様々なコレクションを視察した後で、ギャラリーに入り、ベルニーニ(騎士Cavalier)が、プッサンの作品《ファレリーの教師》を見て次のように述べた。「美しい。これは、ラッファエッロの作風だ(Questo est bello et dipinto della maniera di Raffaello)」。プッサンの作品をこよなく愛したこの芸術家の言葉としてしばしば引用される(CHANTELOU, Voyage, 1960, p.131)。訪問を終えるにあたって、ラ・ヴリリエール侯爵の子供たちが通りまで見送りに出たことも記されている(CHANTELOU, Voyage, 2001, p.250)。

近年、シヤントルーの日記に多くの註を施して優れた研究書が刊行されている(STANIC, in CHANTELOU, Voyage, 2001, p.33-37)。その中で、著者は、ゴンブルストのバリの地図(一六五二年)を引用し、ベルニーニが、ラ・ヴリリエールを訪れた頃の、ルーヴル宮とリシュリエー枢機卿宮、そしてラ・ヴリリエール邸の位置関係を分かりやすく図示している。実際、現在はフランス銀行となっているこの邸は、ルーヴル宮から歩いて、十数分の位置にある。

ところで、若干時間は遡るが、一六四八年に、ラ・ヴリリエール国務卿がその美術行政に深く関わっていた事実が知られている(MONTAIGLON, 1853, I, p.33)。こうした事実を念頭におくと、次のような連想に誘われる。このギャラリーを訪れるのは、何も、国王の来賓格のベルニーニや、批評家シヤントルーだけでではなかった筈である。アカデミー成立のあと、多くの美術コレクションを持つこの邸がその授業のカリキュラムに平行して、時に、若き画学生の校外授業の教場になっていたとしても、不思議はない。

## IV コレクションのその後

一七一三年 ラ・ヴリリエール邸が、トゥールーズ伯爵 comte de Toulouse 邸に変わる(BRICE, 1725)。

一七三七年 邸の所有が、息子の、ペンティエヴル公爵 duc de Penthièvre に変

わる。

二百数十点を数えた絵画コレクションの中の作品も、このような歴史を経る過程で四散する。絵画は、それぞれの来歴を重ねることとなる。

一七九三年一〇月二三日 革命に際して、ペンティエヴル伯爵の私産が、共和国の留保財産として没収された。この時点では、すでに、三七点の絵画しか存在しなかった(1985 COITE, p.90)。

国民公会が開かれていた時期に、建物は「国立印刷所 Imprimerie nationale」に変更される。

一八一一年以降、「フランス銀行」となる(1988 HAFFNER, p.29)。

## V 凡例・省略記号・文献・註

### A 凡例

省略記号には二種類を使用している。

- ① BRUNETT のように、語頭に著者名を記述したものは、「省略記号」の部分に対応した書誌事項が書かれている。
- ② 1988 HAFFNER のように、刊行年を語頭に記述したものは、「ラ・ヴリリエール邸関係文献(編年)」に対応している。

### B 省略記号

AAF: Archives de l'histoire de l'art français

Actes, Poussin, 1960 : Nicolas Poussin, actes du colloque, sous la direction de CHASTEL (A.), SNRS, 1960, 2 vol.

BELLORI, VITE(BOREA): BELLORI (G.P.), *Le vite de' pittori, scultori e architetti moderni*, 1976, G. Einaudi, a cura di E. Borea.

BONNAFFE :BONNAFFE (E.),*Dictionnaire des amateurs français au XVIIe siècle*,1884,A. Quantin

BRICE,1752 :BRICE (G.),*DESCRIPTION//DE LA VILLE//DE PARIS/ ET DE TOUT CE QU'ELLE CONTIENT// de plus remarquable*,1752,Paris,Chez les Libraires Associés,M.DCC.LII,4 vol.,9e éd. ;復刻版 1971,Minard,Coll.Hautes Etudes Médiévales et Modernes,no.12

BRUNET:BRUNET (J.-C.), *Manuel du libraire et de l'amateur de livres*, 1860-1870,F.Didot,7 vol. ;復刻版 1990,Slatkine

*BSHAF:Bulletin de la Société de l'Histoire de l'Art français*

CHANTELOU,*Voyage* ,1884: (1665) 1884 CHANTELOU (F. de) , 《Journal du voyage de cavalier Bernin en France》,1884,*GBA*,p.451-464 (manuscrit inédit, publié et annoté par LALANNE,L.)

CHANTELOU,*Voyage* ,1960 : (1665) 1960 CHANTELOU (F.de) ,*Voyage du cavalier Bernin en France*,;*Actes, Poussin*,1960,II,p.123-133 (THUILLIER,J.)

CHANTELOU,*Voyage*,2001 ; (1665) 2001 CHANTELOU (F.de) ,*Voyage du cavalier Bernin en France*, Macula,L'insulaire (éd.STANIC,M.)

COLANTUONO,*Reni*,1997: COLANTUONO(A.),*Guido Reni's Abduction of Helen*,Cambridge U.P.

*DA : Dictionary of Art*, Grove, ed. TURNER (J.),34 vol. 1996

*DPIML*,1996 :HBERT(J.),LOIRE(S.),SCAILLIEREZ(C.) et THIEBAUT(D),*Catalogue des peintures italiennes du Musée du Louvre,catalogue sommaire*, coordination par FOUCART- WALTER(E.), Gallimard

FELIBIEN,*ENTRETIENS:FELIBIEN(A.),ENTRETIENS SUR LES VIES ET SUR LES OUVRAGES DES PLUS EXCELLENS PEINTRES ANCIENS ET MODERNES*,1666-88,PARIS,S.Marbre-Cramoisy,etc.,5 vol.;復刻版 1972,Minkoff.3 vol.

*GBA:Gazette des Beaux-Arts.*

HALL:HALL (J.),*Dictionary of Subjects and Symbols in Art*, 1974,Harper and Row,Coll.Icon;邦訳には、ホーホル『西洋美術解説事典』河出書房新社、一九八八、監修・高階秀爾、邦訳・高橋達史、他

KIMURA, Faleries, 1996 : KIMURA (S.), 《A propos de Camille et le maître d'école de Faleries:aspects iconographiques》, *Nicolas Poussin*,1996,Coll.Louvre, conférences et colloques, La documentation Française,2 vol. I,p.505-519

木村・二〇〇六・拙著『ニコラ・プッサンとイエスマン図像の研究』中央公論美術出版、二〇〇六年

木村・「アリオ論」二〇〇九・拙論「版画家イザーク・アリオについて……1610-20年代のバリの視覚文化の一面」『日本大学芸術学部紀要』二〇〇九年、四九号、六九-九三頁

木村・「シヤンパーニエ論」二〇一〇・拙論「アントン・ワヰリヒアン著「アイリッブ・ト・シヤンパーニエ伝」……一六二〇-一四〇年代における宗教画制作を視点に考える」『日本大学芸術学部紀要』二〇一〇年、五一号、三九-五四頁

LAROUSSE,19:LAROUSSE (P.) , *Grand dictionnaire universel du XIXe siècle*, 1866-79,17 vol.

*LCI: KIRSCHBAUM SJ. (E.)* (Herausgegeben von), *Lexikon der christlichen Ikonographie*, 8 vol. Herder , (1968-1976) 1990

LIVY,Loeb, English translation by B.O. Foster, 1919-1951,I ??

リウイウス (京大) : リウイウス『ローマ建国以来の歴史』京都大学出版会、西洋  
古典叢書、岩谷智恵訳、二〇〇八年

Loeb:The Loeb Classical Library, Harvard UP,Heinemann

LOIRE,Louvre,Bologne,1996: LOIRE(S.), *Musée du Louvre, département des  
peintures,Ecole italienne, XVIIe siècle ; 1.Bologne,1996,RMN*

LOIRE, Louvre,Florence,etc.,2006 : : LOIRE(S.), *Musée du Louvre, département  
des peintures,Ecole italienne du XVIIe siècle ; Florence,Gênes,Lombardie,Naples,  
Rome, et Venise,2006,RMN*

MALVASIA,FELSINA PITTRICE;MALVASIA(C.C.), *FELSINA PITTRICE//  
VITE//DE PITTORI BOLOGNESI* 1678, 2 vcl.; 復刻版 1971,Bologna,Alfa,  
introduzione e testi a cura di BRASCAGLIA (M.)

MARIETTE :CHENNEVIERES (Ph.de) et MONTAIGLON (A.de), *Abecedario  
de P.J.Mariette et autres notes inédits de cet amateur sur les arts et les  
artistes, (Ca.1740-1770)* 1851-60 ,J.B.Dumoulin (脚注のある校訂版) (復刻版 F.de  
Nobelet, 1966,6 vol.)

松原 : 松原国師『西洋古典学事典』京都大学出版会、二〇一〇年

MONTAIGLON,*Mémoires*,1853:MONTAIGLON (A.de), *Mémoires pour servir  
à l'histoire de l'Académie royale de peinture et de sculpture : depuis 1648  
jusqu'en 1664*, P. Jannet;復刻版 Minkoff,1973

PIGLER :PIGLER (A.), *Barockthemen*, 1974,Akadémiiai Kiad,3 vol.

*Plutarch's Lives*, Loeb : *Plutarch's Lives*, Loeb,1914-26,11 vol.

『アルターク英雄伝』(岩波) : 『アルターク英雄伝』邦訳・河野真一、岩波文庫、  
一九五二―五六年、全十二巻

RMN : Réunion des musées nationaux

SAUVAL :SAUVAL (H.), *HISTOIRE ET RECHERCHES DES ANTIQUITES  
DE LA VILLE DE PARIS*, (vers1655) 1724,Paris,C.Moette et J.Chardon,3 vol.;  
復刻版,Minkoff,1974,3 vol.

SCHNAPPER,*Curieux*,2005:SCHNAPPER (A.),*Curieux du grand siècle,  
Collections et collectionneurs dans la France du XVIIe siècle*, (1994) 2005,  
Flammarion, Coll.Chamns,no. 647, deuxième éd.rev. et mise à jour à partir  
des notes de l'auteur par SZANTO (M.) et MOUQUIN (S.)

*Seicento* : Expo.itinéraire PARIS-MILAN, *Seicento,le siècle de Caravage dans  
les collections françaises*,RMN,Musées Nationaux; Grand Palais, Palazzo Reale,  
1988-89, cat.par BREJON DE LAVERGNEE (A.), LOIRE (S.),etc. 巻末の参考  
文献リストが出色である。

THUILLIER,*Vouet*:PARIS:Expo.*Vouet*,Musées natiniaux,Grand Palais, 1990, cat.  
par THUILLIER (J.) ,etc.

TITE-LIVE,Belles Lettres : TITE-LIVE, *Histoire romaine*, 1940-; texte établi  
par BAYET (J.) ; et traduit par BAILLET (G.) , Les Belles lettres,Coll. des  
universités de France,31 vol.

VAN RUYVEN-Z.:VAN RUYVEN-ZEMAN (Z.) and LEESBERG (M.),*The  
Wierix Family*,Sound & Vision,Coll.The New Hollstein Dutch and Flemish  
Etchings,Engravings and Woodcuts,1450-1700,10 vol.,I (2003), III (2003), VI,  
VII (2004) - (現在継続中)

VILLOT :VILLOT (F.), *Notice des tableaux[...]*du Louvre,1858,3 vol.



C ラ・ヴリエール邸関係文献 (編年)

① 同時代の古文書関係資料

現在、フランス国立図書館や、同古文書館には、邸宅建築の図面、並びに、建築等に関する取計書、あるいは、ラ・ヴリエール家の遺産目録等が残されていることが、先行研究で指摘されている(1985 COTTE,p.90 ;1998 CHAULEUR et LOUIS, *F.Mansart*, p.322-323 ;(1994) 2005 SCHNAPPER, *Curieux*,p.166)。筆者は、それらを開覧する努力をしてきたが(図3)、十分な調査には至っていない。

② 刊行された資料

☆作品等に関する記録 (十七ー十八世紀)

(1635-50) 1998 《L'Hôtel de la Vrillière》, in CHAULEUR (A.) et LOUIS (P.-Y.), *François Mansart : les bâtiments : marches de travaux (1623-1665)*, Champion, p.295-337

ラ・ヴリエール邸建築に関しての古文書を集めた重厚な資料集。

1655 (vers) SAUVAL,II, 《L'HOTEL DE LA VRILLIERE》, p.226-232

本稿に、一部の邦訳を掲載した。どの研究の場合も、先ず参照するべきものとして引用される。建築、絵画、工芸の各部分に目配りのよい分析を行っている。古典主義美術ともいえる価値判断が組み込まれる。

(1665) 1884 CHANTELOU, *Voyage*, p.453-454

イタリアの彫刻家・建築家のベルニーニが、ラ・ヴリエール邸を、フランス滞在中の一六六五年の十月十一日に訪問した際、シヤントルーが書き残した記録。ギャラリーも訪れ、ブッサンの作品についての評価を始め、興味深いコメントが書き残されている。ラ・ヴリエールの子息に面会したことも書かれている。

(1665) 1960 CHANTELOU, *Voyage*, p.131-132

前記資料を、古文書から再度書き起こして、関連文献等の註を入れ、THULLIER

が、修正追加を行ったもの。ラ・ヴリエール邸訪問に関しては抄録。

(1665) 2001 CHANTELOU, *Voyage*, p.250

STANIC による新たな註が入る。

1678 MALVASIA, *FELSINA PITTRICE*,II,p.384

ボローニャ派の絵画を論じた基礎文献であるが、ラ・ヴリエールが行った注文についての言及がある。

1681 《Inventaire après décès de Louis Phélypeaux de La Vrillière》, Archives Nationales, cité par 1985 COTTE, ルイ・フェリポ・ド・ラ・ヴリエール死後の財産目録を纏めた資料集。建築史家であるコッテ女史による労作。

1685 FELIBIEN, *Entretiens*, IV,p.205-206 資料に関する註Dに参照

(Ca.1740-1770) 1851-60 MARIETTE,IV,p.378

G・レーニエの真作である図8が、この時期に、ラ・ヴリエール邸にあることを記述している。

1752 BRICE,I,p.434-444

ラ・ヴリエール邸がトゥールーズ邸と呼ばれている。

1873 《La Vrillière (Louis Phélypeaux,comte de Saint- Florentin, marquis de)》, LAROUSSE,19, X, p.274

☆学術的な分析が行われる時代の資料

1884 BONZAFFE,p.168-170

基本的な事典であるが、ソヴァール以降のデータを巧く纏めていて、先行研究の記述が重要。

1937 CHENEVIER (R.), 《L'ancien Hôtel de Toulouse, La Banque de France》, *L'Illustration*, No.4922,p.317-323

この時期のフランス銀行内部の様子を色彩図版で紹介している。

1954 SAINTE-BEUVE (M.-E.), 《Le tombeau de Phélypeaux de la Vrillière à Châteauneuf-sur-Loire》, *GBA*,9,p.117-122

ラ・ヴリリエール侯爵の墓を紹介している。

1966 VITZTHUM (W.), 《La galerie de l'Hôtel La Vrillière》, *L'Oeil*, 1966, déc., no. 144, p.24-30

一般の概説であるが、図版が多数入り、全容を理解するには優れた内容。

1973 BRAHAM (A.) and SMITH (P.), *François Mansart*, Coll. Studies in Architecture, no.13, A. Zwemmer,2 vol., I,p.31-38,209-214;II.no.139-151

本格的なマンサール研究のモノグラフ。建築面からは、図面を含め、最も詳しい。

1981 LUDMANN (J.-D.) et PONS (B.), 《Nouveaux documents sur la galerie de l'hôtel de Toulouse》, *BSHAF*, Année 1979,p.115-128,特に note 40-53

1982 DIRANI(M. T.), 《Mecenati,pittori, e mercato dell'arte nel Seicento:Il Ratto d'Elena di Guido Reni e la Morte di Didone di Guercino nella corrispondenza del Cardinale Bernardino Spada》, *Ricerche di storia dell'arte*,16,p.83-95

1982 FELDMANN(D.),《Das Hôtel de La Vrillière und die Räume "à l'italienne" bei Louis Le Vau》, *Zeitschrift für Kunstgeschichte*,VL,p.395-422

1985 COTTE(S.), 《Inventaire après décès de Louis Phélypeaux de La Vrillière》, *AAF*,XXVII,p.89-100

1988 COTTE (S.), 《Un exemple du "goût italien":la galerie de l'hôtel de La Vrillière à Paris》, in *Seicento*,p.39-46

建築古例からの視点に立ち、ラ・ヴリリエールのギャラリーの絵画について、その

「イタリア趣味」のありかたについて分析をしている。展覧会カタログ *Seicento* の巻末にある参考文献リストが出色である。

1988 HAFFNER (C.), 《La Vrillière, collectionneur et mécène》, p.29-38, in *Seicento*,p.29-38

ギャラリー全体に目配りし、精緻な考証を行っている。

(1994) 2005 SCHNAPPER, *Curieux*, 特に p.186-171

*Seicento* で纏められた資料を整理し、さらに、古文書を挿入しながら、フランス十七世紀における壮大なコレクター論の一環に、ラ・ヴリリエール・コレクションも取りあげた名著。

1996 BERESFORD(R.), 《La Vrillière,Louis Phélypeaux de》, *DA*, XVIII,p.885

1996 KIMURA, *Faleries*

ラ・ヴリリエールについては論じていないが、ブッサンの作品の《ファレリーの教師》の図像論に集中して分析を試みた拙論。ブッサン国際シンポジウム（一九九四年十月）における発表内容である。

1996 LOIRE, *Louvre,Bologne*

ルーヴル美術館学芸員のロワール氏が執筆したボローニヤ派の目録。データだけでなく、先行研究の咀嚼、紹介に基づく優れた論考が入る。

1997 COLANTUONO, *Reni*

レーニの作品（図G4）に集中して行った詳細な研究のモノグラフ。Seicento以降の豊富な研究成果の一つ。

1998 BARREAU(J.) et GADY(A.), 《L'hôtel de La Vrillière,rue Neuve-des-Petits Champs 1635-1650》, in MIGNOT(C.) et BABELON(J.-P.)(sous la direction de), *François Mansart : le génie de l'architecture*, Gallimard,p.147-155

パリ第IV（ソルボンヌ）大学における、十七世紀建築史の専門家ニエヨが監修して実現した、一次資料集、参考文献を含む、本格的なマンサール論のモノグラフ。そ

の後、大きく成長するガディが、ラ・ヴリエール邸論を書いている。

1998 CHAULEUR (A.) et LOUIS (P.-Y.), *François Mansart : les bâtiments : marches de travaux (1623-1665)*, Champion,p.295-337

近年の、建築史上の労作。フランスの国立古文書館などに収蔵されている古文書を纏めている。

2001 STANIC (M.) , 《Chronologie du Louvre》 ,in 1665 Chantelou, Voyage, p.33-38

一六六五年前後の、ルーヴル宮殿の周辺の地図 (Goboust,1652) などを提示し、ラ・ヴリエール邸の位置がよく記述されていて、ベルニーニ訪問時の状況について詳しい。図書の巻末にある参考文献リストが出色である。

2004 PIEGUIDI(S.), 《Il programma sacrificato ai pittori:le gallerie La Vrillère (Parigi,1635-1660),Spada(Roma,1698-1705),e Bonaccorsi (Macerata, 1710-1717)》, *Saggi e memorie di storia dell'arte*,28,p.129-168

2006 LOIRE, *Louvre,Florence,etc.*

2008 GADY(A.), *Les hôtels particuliers de Paris*, Parigramme,p.188-189

建築史家として近年活躍するナント大学教授ガディの貴重な労作。パリ都市邸宅の事典。

註

1. 近年の優れた研究報告から、以下のような、建築上の資料が指摘されている。

一六三五年三月八日、石工バステルが書いた邸宅建設の関する文書には、マンサールによる設計とその指示についての記録が確認されている (1998 CHAULEUR et LOUIS,no.80,p.302)。

一六三七年六月九日付け、石工バステルと採石業者アベルの間に交わされた文書では、リシユリエー枢機卿公園の近くにあるラ・ヴリエール邸建設という文言が確認できる。実際は、Rue Neuve des Petits Champs に正面の入り口が面していた。西は、枢機卿

宮の庭園側であった (Rue Neuve des Bons Enfants)。現在は、ほとんどが改築されてしまっていて「フランス銀行」となっている。図面等に関しては、上記の 1937 BRAHAM and SMITH, に詳しい。

2. SAUVAL,p.229. ラ・ヴリエール邸全体については、さらに詳しい記述が書かれている。邸宅部分、玄関、階段、ギャラリィ、等の構成で詳述されている。

3. POMIAN (K.), *Collectionneurs, amateurs et curieux : Paris, Venise, XVIe-XVIIIe siècle*,1987, Gallimard ,Coll.Bibliothèque des histories';ボミアン (K.) 『コレクション：趣味と好奇心の歴史人類学』平凡社、一九九二年、邦訳・吉田城・吉田典子

4. 父親 Raymond (1560-1629) は、中央政府の要となる職である國務卿 *Serétaire d'Etat* を努めていた。誕生は、一五九九年。一六一九年以降、官職についており、同一〇年には、國務卿、同一九年には、国王付き (*auprès du roi*) となる。

一六三四年、セキエ大法官 *Chancellor Séguier* から、シャルル五世の城壁を壊した跡地である、枢機卿宮屋敷に接した地所を譲り受ける。

一六三五年 Marie Particelli と結婚。妻は、財務官、Michel Particelli d'Hémery (1596-1650)、財務行政の最高責任者でも財務卿 *Surintendant des Finances* の娘。一六三三、一六三六〇〇リーヴルの持参金があった。これがきっかけとなり、邸宅の建設に向かう (1988 HAFFNER,p.29)。墓については、1954,SAINTE-BEUVE。

5. (1994)2005 SCHNAPPER, *Curieux*

6. 1985 COTTE, p.85 ;1998 CHAULLIER et LOUIS, no. 91,p. 335

7. この書物の草稿の執筆時期については、難しい問題がある。THUILLER, *Vouet*,p.527 では、一六五五、一七〇〇の間、という見解をとっている。しかし、本稿では、*Seicento* のカタログでの見解と同じく、一六五五年頃として論考を進めた。

8. 1985 COTTE,p.90

9. 1985 COTTE,p.90 王の常任彫刻家であった、J.-J.Clérion の前で作成された九十点

の彫刻の他に、寶石、書籍等の目録もある。コチ女史は、これら2件の目録を書き起こすことに成功し、膨大な教に上るリストを作成している。

10. 1988 HA757E7P03337。その後の来歴については、たとえば、ルーヴル美術館所蔵のものには YHLO11858BONZAF7E1884p168 などでも確認することが易しいものもある。

## VI 資料

「ラ・ザリリエール邸のギヤラリー」に関するアンリ・ソワールの記述(図版を挿入した抄訳)  
アンリ・ソワール著『パリの文化財の歴史とその研究』(草稿は一六五五年頃執筆)一七二四年刊行、二九一―三三頁

ギヤラリー

このギヤラリーが、パリの中にあるギヤラリーと比べて、あるいは、フランス全土のものと比べても、最も高い完成度を誇るものである。(・・・)

先ず、奥行き二五トワース(訳注:約四九メートル)、幅二五ピエ(訳注:約八メートル)の広さを持ち、庭に面している。一方で、天井は、扁平形の曲面天井(ヴォールト)でおおわれている。そこには、ペリエが五つの部分に分かれた格天井に「四大元素」に囲まれた太陽の寓意を表したフランス画を描き出している(D1)。このギヤラリーの奥行きと幅が合理的で規則性を持っているのは、ひとえに、マンスーの設計のおかげである。以上、二九頁(・・・)

絵画は、側壁に並べられており、一点ずつ嵌め込まれている。画家は、グイト・レーニ、アッサン、ピエトロ・ダ・コルトーナ、グエルチーノ、アレクサンドロ・ヴェロネーゼである。壁面は、左に向かっては、交差リブで、右側は、大きなニッチで分けられている(・・・)。

このギヤラリーに入って右手のすぐ手前に、最初の作品であるブッサンが描いた《カミルスとアンソワール人の教師》(図G1)がある。この作品に描かれた裏切り者の表情と、その身振りに、羞恥心、罪への恐れ、死への不安が素朴に描き出されている。子供たちの様々な表情と身振りに、教師の行為へ鬱憤を晴らした子供だ

ちの満足感が認められる。教師が、自制心を忘れ幾度も鞭打ちで子供たちを痛めつけていたからである。

作品については、色彩の統一感を褒める人もいれば、衣紋表現の素晴らしさを指摘する人もいる。全ての人が、表情やはつきりとした情念表現の多様性、そして歴史画としての権想力を賞賛している。ブッサンが描いた傑作とは言えなくとも、このギヤラリー随一の作品であることには間違いない(D2)。

次の作品(図G2)では、コリオラスの前には、母と妻が身を屈めて、夫に向かって祖国の救済を懇願している。彼は、誇り高く彼らに手を伸ばしている。母の身振りは、ロイヤ的なものとは言いがたく、息子の方は、逆にいさか大げさである。しかし、グエルチーノが描いた作品であり、十分賞賛に値する。一方で、今、指摘したばかりのブッサンの作品と、次に来るコルトーナの作品との間に置かれていなければ、評価は自ずと異なっていたであろう(D3)。

第三の作品(図G3)では、コルトーナが、ロムルスとレムスに対するラテンナイアとアンソワールの慈悲深い行いを描き出している。そこには、優しき、愛、そして、この画家の全ての作品に認められる、よどみない筆さばきと完成度の高い技量がある。ここには、この善良な羊飼いが、アムリウスの怒りとテベレ河から救い出した直後の情景が描かれている。この女性の目には涙が輝いている。美しきとやさしきと、優美さが一層引き立てている。以上、二三〇頁。両腕を前に出した姿勢と衣紋の様子のすべては、この女性の優しさを引き立てている。フアンストゥルスの身体描写の出来映えがよい。肩は退しく、頭髮は滑らかであり、両目は生き生きとしていて表情は素晴らしい。これらが、この画家の資質の高さを物語っている。今世紀の、最も好まれていて、最も知性豊かな画家の一人であると言われることとの理由がここにある(D4)。

四番目(図G4)は、グイト・レーニが描いた彼の最も感動的な作品である。ヘレネを略奪するパリスを描いている。これ程冷静な人物たちがこうした企てをしているということ、そして、パリスがその恋人を、慌てることなくわずかな人数と道具立てだけで奪って行くこととしている事実を理解するべきであろう。この歴史画に描かれた人物たちの中で、ヘレネ以上に秀逸に描かれた人物はいない。優れた表現といえども、部分にはそれぞれ違いが認められるが、ヘレネの人物表現はとりわけ素晴らしい。すらすらとした背丈とその物腰の豊かさ、魅惑的な衣紋表現がある。高貴さと優しさとがその表情に表れている。この絵を少しばかり注意深く観察する人たちからは、溜息が漏れるほどだ(D5)。

ギヤラリのこの側面にあるもう一点の作品(図G5)も、コルトーナのものである。先に述べたコルトーナの作品と比べて、表現力は落ちていくべきであるが、画家はいつも優れた力を発揮できるわけではない。それは、この作品が、「クシオパトラを王位に返すカエサル」という、古代史に展開した威厳に満ちた主題を描かなければならなかったという事情のためなのである。描かれた人物は優美な恋物語故に十分に美しい。しかし、このよく知られた史実からはらむ尊厳さを描き出すための人物構成に、十分成功しているとは言えない(D6)。

ギヤラリの反対側には、まだ、三点の作品しか掛けられていない。その一つが、グエルチーノの作品(図G6)で、ローマとサビニとの間の最後の戦いを描いている。兵士の妻たちが、予期していなかったにも関わらず、唐突にその争いを制止しているところである(D7)。もう一点(図G7)は、友人たちを部屋から退出させる小カトーである(D8)。最後の一点(図G8)が、マルクス・アントニウス(Marcus Antonius)の遺体のそばで死ぬクシオパトラを描いている。画家は、アレクサンデル・ヴェロネーゼ(Alessandro Veronese)である(D9)。三点のうち、二点はグエルチーノ作である。これらの三点は、良質な作品ではあるが、最良のもののものとは言えない(D10)。

天井画には、七くなる直前にペリエが描いた作品がある。この画家の最良で、最も評価されているものである。これほどに、自由で自信に満ちて描いたものはない。

### 資料に関する註

D1 VITZTHUM,1966に、図版も掲載されている。

D2 詳しくは、拙論KIMURA, Fables,1996参照のこと。最新の関連論文は、KEAZOR(H),《La douleur échauffée par la colère:Poussin ed il Laocöote》,Poussin et la construction de l'antique,2011,actes du colloque, Académie de France à Rome,etc, Coll.de l'histoire de l'art,p.475-493

D3 PIGLER,H,p.380-382;HALL,p.74-75;邦訳,p.131;松原 p.291,580-581

典拠は、TTTELIVELIBER Second,XI,邦訳は、リウナス(京大)、四〇・一〇〇八年。前五世紀、ローマから追放されたコリオラスは、かつて自分も戦ったことのある隣国

の部族、ウォルスキ族に加わった。ウォルスキ族の指揮を任された彼は、故郷の町を攻撃

しに戻った。彼の妻ウォルモニアと幼い二人の息子、そして母ウォルリアが彼に接見し、攻撃を中止するように諫言する。彼らの願いは聞き届けられたが、ウォルスキ族のもとは戻ったコリオラスは裏切りものとして処刑された。アルタルコス(岩波)第三巻三四一三六)。栗田秀法「ツツソンの物語画の意味構造・『コリオラス』をめぐって」『美奈美術史研究論集(名古屋大学)』二二号、一五三-一頁には、この時代のコリオラスとスヌ像の展開が詳しく論じられている。

D4 PIGLER,H,p.416-417;HALL,p.267-268(邦訳p.377)；松原 p.103,137,1387.

典拠は、ΠΥΡΡΙΝΕΙΩΝ ΠΡΩΤΗ；邦訳リウナス(京大)(第一巻四)。

ロムルスとレムスの母はウエスタの巫女。身重になった時は、軍神メルスに犯されたと申し述べた。彼女は投棄され、子供たちは、テラエリ川で溺死させよ、という命令が下る。その後、彼らは生き延び、牡狼とキツツネに育てられた。後者は彼らの見張りをし、食物を運んできた。やがて、牛飼いのファウストルスが彼らを発見することとなる(HALL)。なお、ラウレンティアについて、ソヴァールが、COISSINIEという単語を使用している理由には、「身持ちの悪さゆえに(Possine)羊飼いのあいだでは、雌狼として通っていたと考えるものもある」という指摘が参考になる。

D5 PIGLER,H,p.319-321;HALL,p.45(邦訳p.302)；松原 p.1148-1149

ヘレネは、スパルタ王メラネオスの妃。トロイアの王子パリスは、ヘレネに恋し、夫の不在中に方づくで海路トロイアに連れ去った。ギリシヤ人たちはヘレネを奪い返すために遠征を開始し、かくしてトロイア戦争が起こった(HALL)。この作品については、無数の先行研究が指摘されている。とりわけ、1997 COLANTONIOは、同時代資料を網羅し、ローマにある古文書資料を網羅し、丁寧な分析を試みた労作である。ここでは、その全てを紹介することはできないが、同時代資料のうち代表的なものを、指摘しておきたい。

(1672)1976 BELLORI,VITE(BOREA),p.527 スペイン王フェリペ(II re di Spagna Filippo)からの依頼であることが指摘されている。

(1675)1925 SANDRART,FELTZER,p.28では、die schöne Helenaについての言及がある。

(1678)1971 MALVASIA,p.170, Ratio di Elenaにまつわる、制作依頼と来歴の政治的な事情に言及がある。

1685 FELBIENENTRETTENIV. p.205-206 以下に、フェリビアン人の記述内容を、この作品に絞って邦訳を試みた。

「レーニが、ローマに作品を送付すると、スペインの廷臣たちには、その制作に寛大に酬いようとする意志がなく、レーニは、それをポローニヤに送り返さしてしまった。その後、リヨンの商人が、マリー・ド・メテシスのために購入した。しかし、ちょうどこの時期、彼女はフランスを離れ、フランドルの地に亡命していたので、この作品は、しばらくの間はこの商人の手元にあった。何年か後に、國務卿であるラ・ヴリエール氏に売却された。」

D 6 クレオパトラの画像全般については、PIGLER II, p.395-403, 413, HALL, p.71 (邦訳 p.115-116); 松原 p.535-536。一般的な典拠は、Plutarch's Lives, Loeb, IX, 1920, Antony, 『フルターク英雄伝』(岩波)、第十一巻、一九五六年「アントーニウス」。

D 7 PIGLER II, p.423; HALL, p.270 (邦訳 p.142-143); 松原 p.611, 1132

典拠は、Plutarch's Lives, Loeb, I, 1914, Romulus, XIX, 『フルターク英雄伝』I, 京都大学出版局、二〇〇七年、一九(ロムルス)、邦訳・柳沼重剛。

ヘルシリアとは、前七五三年、ロムルスの部下によって略奪されたサビニの女たちの一人。報復のためにサビニ族がローマ人と戦った折りに、赤子を抱いた彼女は他の女たちの先頭に立って、両軍の間に割って入り、「どちらが勝っても私たちは愛する人を失うのです。ローマが勝てば、父や兄弟を、サビニが勝てば、夫を」と叫んで双方をとりなし、休戦と和睦を実現させた(松原)。

D 8 PIGLER II, p.376-377; HALL, p.60. (邦訳 p.92-93); 松原 p.416-417

典拠は、Plutarch's Lives, Loeb, VIII, 1919, Cato the Younger, LXX, 『フルターク英雄伝』(岩波)、第九巻、一九五六年、七〇(小カトー)

小カトー(前九五―四六)は、ローマの政治家。ストア派のゆるぎない信条の持ち主として知られる。カルタゴ近郊のウティカの総督を務めていたが、内戦においてポンペイウス側に立ち、味方の敗北を知ると、自殺を企てた。プルタルコスによれば、自殺の意志を察知した息子によって取り上げられた剣を、憤然として要求したあと、彼は寝室にこもった。家の者が寝静まるまでプラトンの『パイドロス』(靈魂の不滅とソクラテスの死を扱う)を読み耽ったあと、自らを刺して血にまみれて死んだ(HALL)。

D 9 PIGLER II, p.398; HALL, p.71 (邦訳 p.116)。

典拠は、Plutarch's Lives, Loeb, IX, 1920, LXXXVI, 邦訳『フルターク英雄伝』(岩波)、第十一巻、一九五六年「アントーニウス」八六。クレオパトラは敗残の身をさらすのを嫌い、コブラに身を咬ませて自らの命を絶った。

なお、ここに記述された、画家は、「アレクサンドル・ヴェロネーゼ」であるという指摘は、1885 COTTE (p.94) にも記述が認められる。また、ソヴァールは、前景に死んで横たわる男性を「マルクス・アントーニウス」であるという指摘しているが、ともに、現在の解釈では採用されていない(VOLLEN, *Seicento*, 1988, no.150, p.367)。

D 10 ソヴァールが執筆したこの時点では、以下の、図 G 12・13 の二点は、まだ展示されていなかった。

図 G 12 の、コルトーナ作《ティブルの巫女とアウグストゥス帝》は、REAU, I, p.421-424, CIT. (1968) 1991, p.226-227 (RED); HALL, 邦訳 p.325; PIGLER, I, p.479-482 に指摘がある。

ローマ元老院は、アウグストゥス帝(オクタウィアヌス)の神格化を布告。アウグストゥス帝はこれを受けるべきか否かを、巫女に相談したところ、巫女は、ローマの神々よりも偉大な一人の幼児の到来を予言した。その時、天空が開けて、皇帝はキリストを腕に抱いて祭壇の上に立つ聖母の幻を見た(HALL)。

☆本研究は、平成二十三年度における、科学研究費・基盤研究(C)、「17世紀フランスにおける歴史画と挿絵本との関係についての総合的研究」。同基盤研究(C)「近代英国を中心としたエンブレムにおける聖と俗の表象に関する学際的研究」並びに、芸術学部共同研究費「アート・アーカイヴ構築に向けての基礎研究」同一一般研究「日欧の17世紀における、挿絵と絵画との関係についてのデジタル・アーカイヴ基礎研究」にもとづく研究である。

☆建築用語については、三宅理一、藤女子大学教授からご教示を得た。また、いづもながら、仏文要旨に関しては、日本大学芸術学部講師、マルグリット・ドゥマルヌ女史の手を煩わせた。ここに深謝したい。

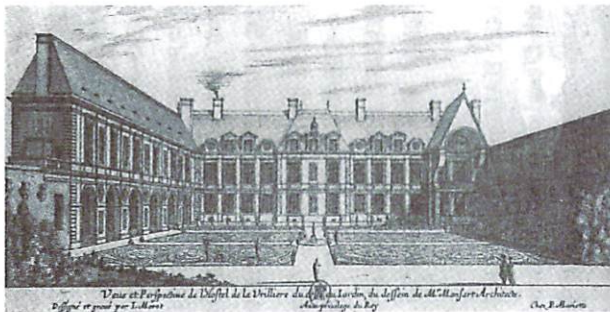


図2 J・マロ《ラ・ヴリリエール邸》  
フランス国立図書館、版画室蔵  
庭園側  
文献・1966 WITZHUM,p.24;1988 HAFFNER,p.30



図1 《ルイ・フェリポ・ド・ラ・ヴリリエール侯爵の肖像》  
ナントイユ版刻  
1662年 フランス国立図書館版画室蔵  
1988 HAFFNER,p.29,fig.1.

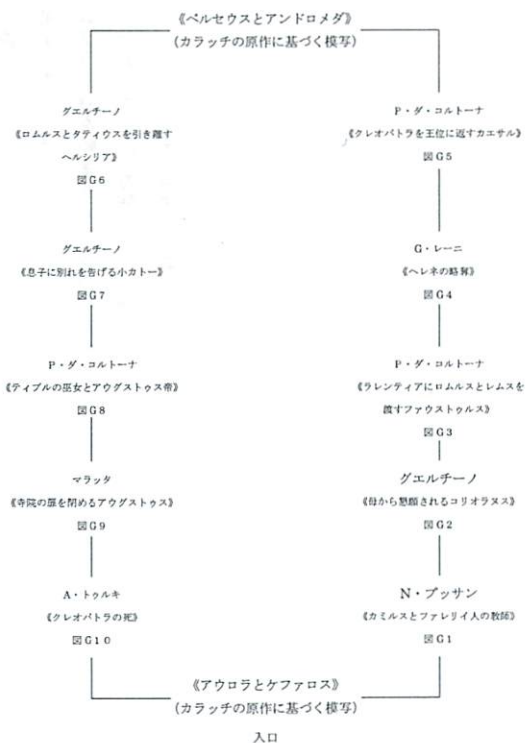


図4 《ラ・ヴリリエール邸・ギャラリーの展示》  
文献・1988 HAFFNER, *Seicento*, p.32

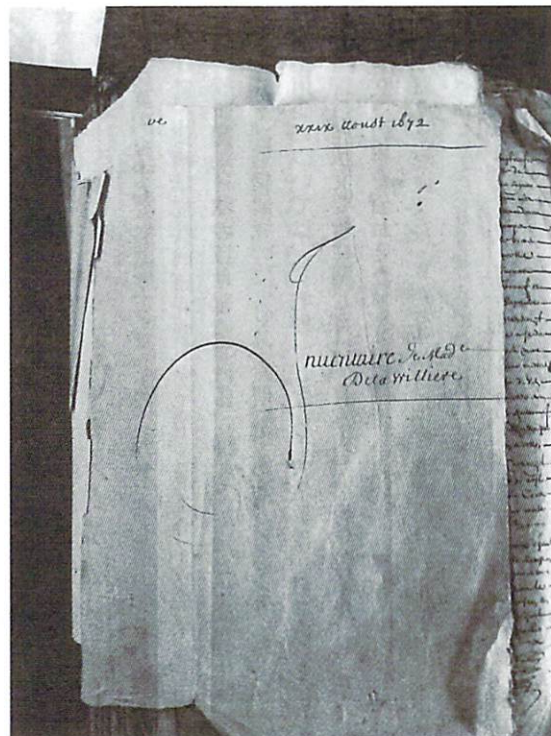


図3 ラ・ヴリリエール家遺産目録  
Archives nationales, M.C. XI,239,1672  
文献1985 COTTE,p. 90



図G2 グエルチーノ《母から懇願されるコリオラヌス》  
1643年 カーン美術館  
画布・油彩 2.47 (3.34)×2.63 m  
文献・1988 LOIRE, *Seicento*,no.85,p.244-245



図G1 N・ブッサン《カミルスとファレリイ人の教師（生徒たちにファレリイの教師を引き渡すカミルス）》  
1637年 パリ、ルーヴル美術館 画布・油彩 252×268cm  
文献・1988 BREJON DE LAVERGNEE, *Seicento*,no. 116, p.305-307; 1996 KIMURA, *Faleries*



図G4 G・レーニ《ヘレネの略奪》  
1629年頃 パリ、ルーヴル美術館 画布・油彩2.53×2.65 m  
文献・1988 BONFAIT, *Seicento*,no.128,p.326-329; 1996 *PIML*,p.162;1996 LOIRE, *Louvre,Bologne*,p.323-333



図G3 P・ダ・コルトーナ《ラレンティアにロムルスとレムスを渡すファウストゥルス》  
1643年頃 パリ、ルーヴル美術館 画布・油彩2.51×2.65 m  
文献・1988 HAFFNER, *Seicento*,no.54,p.187-188; 1996 *PIML*,p.138;2006 LOIRE, *Louvre,Florence,etc.*p.117-120





図G6 グエルチーノ《ロムルスとタティウスを引き離すヘルシリア》

1645年以前 バリ、ルーヴル美術館, Inv.85  
 画布・油彩2.55×2.67 m  
 文献・1988 LOIRE, *Seicento*, no. 86, p.246-247;1996  
*PIML*,p.150;1996 LOIRE, *Louvre,Bologne*,p.253-257



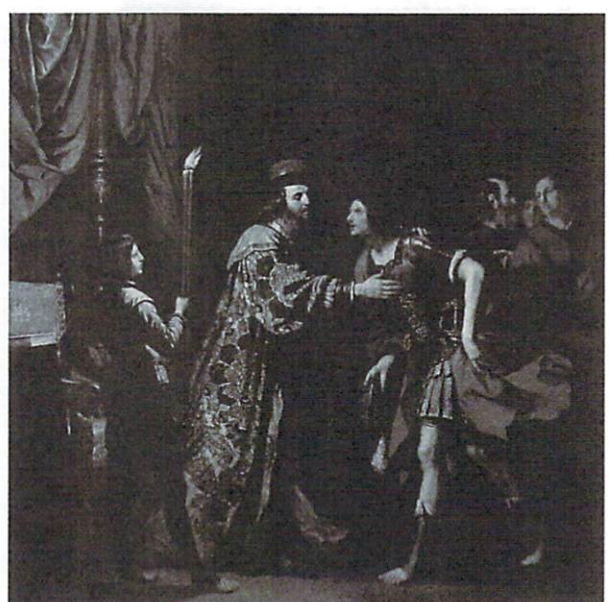
図G5 P・ダ・コルトーナ《クレオパトラを王位に返すカエサル》

1643年頃 リヨン美術館  
 画布・油彩2.55×2.66 m  
 文献・1988 MAYER et VOLLE, *Seicento*, no. 53,  
 p.185-186



図G8 P・ダ・コルトーナ《ティブルの巫女とアウグストゥス帝》

1660年頃 ナンシー美術館  
 画布・油彩2.74×2.68 m  
 文献・1988 FONTET, *Seicento*, no. 55, p.189-190



図G7 グエルチーノ《息子に別れを告げる小カトー》

1635-37年 マルセイユ美術館  
 画布・油彩2.63×2.67 m  
 文献・1988 LOIRE, *Seicento*, no. 84, p.241-243



図G10 A・トゥルキ《クレオパトラの死》  
1637-40年頃 バリ、ルーヴル美術館  
画布・油彩2.55×2.67 m  
文献・1988 VOLLE, *Seicento*, no. 150, p.367;  
1996 *PIML*, p.175



図G9 C・マラッタ《寺院の扉を閉めるアウグストゥス》  
1655-57年頃 リール美術館  
画布・油彩2.80×2.75 m  
文献・1988 KUEHNMUNCH, *Seicento*, no.98,  
p.271-274